

『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』

西岡加名恵著

図書文化, 2003年

ここ数年、私はポートフォリオ評価法について研究してきました。この度、その成果をまとめた拙著を出版したところ、このような紹介文を書く機会を与えていただき、誠にありがとうございます。

ポートフォリオとは、子どもの作品や自己評価の記録、教師の指導と評価の記録などを系統的に収集したファイルなどのことを指します。ポートフォリオ評価法は、子どもたちにポートフォリオ作りを行わせることによって、子どもたちの自己評価力を育むとともに、教師も子どもの学習と自分の指導をより幅広く、深く評価しようとするアプローチです。

日本において、ポートフォリオ評価法は、総合学習に適した評価法として注目を集めました。しかし、英米においてはむしろ教科教育において用いられています。新指導要録において導入された「目標に準拠した評価」（以下、目標準拠評価）を充実させる上でも、ポートフォリオ評価法が果たす役割は大きいと考えられます。

英米における実践をみると、ポートフォリオには基準準拠型・基準創出型・最良作品集という三種類があることがわかります。基準準拠型ポートフォリオというのは、教育する側が評価基準を予め設定し、それと照らし合わせて作品を収集していくタイプです。一方、最良作品集ポートフォリオの場合は、子どもが自分にとって重要な作品を自由に選ぶことができます。基準創出型ポートフォリオは両者の中間的な形態であり、教師と子どもが相互交渉を行いながら、どの作品を残していくかを決めていくタイプです。ポートフォリオについては目的に応じてどの種類を用いるかを選ぶことが重要と言えましょう。本書では、それぞれのタイプのポートフォリオについて、英米と日本での実践例を踏まえて論じています。

まず第1章では、日本における教育評価研究のこれまでの流れを概観しています。目標準拠評価の先行理論ともいべき到達度評価論において残されていた課題を明らかにするとともに、近年の学習観の転換（構成主義学習論）や新しい評価論（「真正の評価」論など）についても紹介しました。

第2章では、ポートフォリオ評価法の基本的な考え方と進め方を確認しています。ポートフォリオが「評価法」となるための基本的な原則を押さえるとともに、ポートフォリオ検討会の進め方について詳しく扱っています。

第3章のテーマは、総合学習と基準創出型ポートフォリオです。ここではカリキュラムにおける総合学習の位置づけを確認した後、基準創出型ポートフォリオをどう活用できるかについてポイントを整理しました。

第4章・第5章では、基準準拠型ポートフォリオに焦点をあて、教科教育においてそれをどのように活用できるかについて探りました。第4章では、指導要録の各観点に対応した評価のあり方を提案するとともに、パフォーマンス課題とその採点指針であるルーブリック（rubric）の開発方法と指導への活かし方も扱っています。さらに第5章では、パフォーマンス課題を取り入れた「学力評価計画」の具体的なイメージを明らかにすることをめざしました。まず評価基準となる妥当な目標を絞り込み、それが達成されたことを示す証拠は何かを考えれば、それらの証拠のリストが基準準拠型ポートフォリオに入れるべき作品の規定となることでしょう。なお、これらの提案を行う上で、イギリスの資格制度は大変参考になりました。

第6章では、子ども中心主義のカリキュラム理論を背景に登場している最良作品集ポートフォリオについて扱いました。代表的実践校である、米国シカゴのクロー・アイランド小学校の事例研究を特に詳しく紹介しています。

未熟な論考ではありますが、ご一読の上、ご意見・ご批評いただければ幸いです。

（西岡加名恵）